

# 「ハレルヤ・コーラス」に関する 言語学的 (Philological) 一考察 (前編)

松浦義夫

## 第1章 序論

いわゆる「ハレルヤ・コーラス」という名称で有名な曲目は、ヘンデルの作曲したオラトリオ『メサイア』の第二部の締め括りに歌われる合唱曲である。このオラトリオ『メサイア』の歌詞を担当した人物は、チャールズ・ジェニズ (Charles Jennens) とされているが、彼は、この曲を『旧約聖書』の預言に始まり『新約聖書』の最後の書である『ヨハネの黙示録』からの引用において終結するという形式で、キリストの生涯を描いているのである。すなわち、キリスト降誕の預言に始まり、降誕、十字架における苦難と死、復活、そして来るべき栄光に満ちた再臨において終結する、キリストの生涯を讃えるオラトリオを作詞したのである。このジェニズは、『メサイア』の歌詞を作詞するにあたって、彼自身で歌詞を創作することよりも、むしろ人口に膾炙している『聖書』からの直接の引用によるという形式を選択しているのである。ところで、このジェニズが引用し、もちろんヘンデル自身も目を通していたと思われる『聖書』は、The Authorized Version (欽定訳) あるいは The King James Version (ジェームズ王版) と呼ばれている、英語訳の『聖書』であろう。しかしながら彼は、ただ単にこの英語訳をそのままの型で引用するというよりも、かなり詳細に一字一句検討するとわかるように、微妙な点でこの英語訳を修正している。拙論は、『メサイア』のなかでも、特に我々にも馴染みのある「ハ

レルヤ・コーラス」に焦点を絞って、この修正に関する点をも含めて、言語学的 (Philological) に考察することを目的としている。

ところで、上に述べた英語訳すなわち The Authorized Version は、1611年にそれまでに出版された様々な英語訳を尊重しつつ新たに翻訳されたもの、ということになってはいるが、その実新しい翻訳というよりも、それまでの英語訳聖書、特にウィリアム・ティンデル訳及びジュネーブ訳聖書を大幅に利用した、改訳版と考えたほうが適切かもしれない。しかしいずれにせよ、この英語訳聖書は、まさに Authrorized と呼ぶにふさわしく、それまでの翻訳を圧倒する型で、最近まで広く読まれてきたわけである。しかし、この英語訳聖書もやはり「英語訳」聖書なのであって、聖書の原典において使用されているヘブライ語及びギリシア語の影響を多く受けているわけである。この点を踏まえた上で、『メサイア』のなかの「ハレルヤ・コーラス」を考察することになるであろう。

『メサイア』は、先述のように、キリストの生涯を、降誕の預言、降誕、十字架における苦難と死、復活、さらに来るべき再臨に至るまでを『聖書』の引用によって語っていく仕組みに構成されており、3部構成になっている。その第1部では、まず『旧約聖書』の『イザヤ書』に記されている預言によって、キリスト降誕の預言が告げられ、キリストの降誕自体も、『イザヤ書』9章6節の言葉によって告げられる。その次に『新約聖書』の『ルカによる福音書』の降誕の記事、『旧約聖書』による預言、『マタイによる福音書』からの引用により、キリストの降誕が人類にとってどのような意義を有しているのかを予感させるような表現によって第1部は締め括られる。続く第2部においては、『旧約聖書』の『イザヤ書』の預言に始まり、『詩篇』からの引用などによって、キリストの十字架における苦難と死が語られ、「ハレルヤ・コーラス」においてキリストの復活と昇天が暗示される。最後の第3部においては、『新約聖書』の『コリント人への第1の手紙』の15章を中心として、キリストの復活の持っている人類に対する意義が語られ、キリストの再臨までの期間、つまり「時の間」に生きる人類への希望に満ちた呼びかけとなっている。そして最後に『新約聖書』の『ヨハネの

---

黙示録』からの引用により、「神の子羊」としてのキリストが父なる神と共に王座に座す場面を描くことによって、「メシア」によって為し遂げられた神の救済計画の完成を讃美し、神とキリストへの頌栄および「アーメン」によって締め括られる。

ところで『メサイア』の3部構成の内容を、時間的な流れという観点から見てみると、第1部はキリストの過去、第2部はキリストの過去から現在、第3部はキリストの現在から未来というような構成になっている。そのなかで第2部の締め括りとして歌われる「ハレルヤ・コーラス」は、キリストの過去を締め括るとともに、現在さらには未来への橋渡しの役割をも担っていると考えられる。このような『メサイア』全体の構成、特にキリストの生涯の時間的流れという観点にも注目しつつ、「ハレルヤ・コーラス」の内容を、具体的に考察していくことにする。

## 第2章 「ハレルヤ・コーラス」の本文の考察

「ハレルヤ・コーラス」の本文は、『新約聖書』の『ヨハネの黙示録』からの引用により、具体的には次のように記されている。

Hallelujah: for the Lord God Omnipotent reigneth.

(19:6)

The kingdom of this world  
is become the kingdom of our Lord,  
and of His Christ;  
and He shall reign for ever and ever.

(11:15)

King of Kings, and Lord of Lords.

(19:16)

Hallelujah!

次に The Authorized Version による同箇所を掲げる。なおイタ

リック体の箇所は、「ハレルヤ・コーラス」の本文と異なっている箇所である。

*Alleluia: for the Lord God omnipotent reigneth.*

(19:6)

The *kingdoms* of this world  
*are become* the kingdoms of our Lord,  
and of *his* Christ;  
and *he* shall reign for ever and ever.

(11:15)

*KING OF KINGS, AND LORD OF LORDS.*

(19:16)

それぞれの箇所を具体的に対照して検討することにするが、両者の異なっている点は、一見して明らかなように、正書法 (orthography) の時代的变化による、大文字と小文字の使用法の差、外来語この場合はヘブライ語のローマ字音写の方法の違い、名詞の単数と複数の違い、の3点に要約できる。

(1) Alleluia ——— Hallelujah

この語句はヘブライ語をローマ字に音写したものであるが、The Authorized Version より「ハレルヤ・コーラス」の本文の方が、より原音に忠実である。「新約聖書」の原典であるギリシア語の本文では、*ἁλληλοῦια* となっておりこの場合も理論的には、「ハレルヤ・コーラス」の方の音写に近い [hállɛ : lú : ia :] であるが、実際的にはむしろ語頭の氣息記号は無視して発音される習慣になっていたと考えると、英語も含めヨーロッパの多くの言語においては、The Authorized Version の音写に近い発音で礼拝儀式においては唱えられていたと思われる。それでは、「ハレルヤ・コーラス」の本文の音写は、何に由来するものなのであろうかという疑問が生じ

---

ることになる。これに関しては二つのことが少なくとも可能性としては考えられる。その第一としては、理論的により原音に近い型に修正した、とする見解。そして第二としては、既に原音に近い型に音写している英語訳聖書のどれかを参考にしているとする見解。この二つとも可能性は否定できないのであるが、第1章においても少しふれておいた、ジュネーブ訳聖書においては、この語句が、より原音に近い型、具体的には、Halleluiahと音写されているので、これを採用したとする見解の方が可能性が高いように思われる。このことから、『メサイア』の歌詞を担当したとされるジェニズなる人物にしても、作曲者であるヘンデル自身にしても、ジュネーブ訳聖書の影響を受けている可能性を考慮する必要があると思われる。

(2) a. omnipotent, his, he ——— Omnipotent, His, He

一見して明らかなように、正書法 (orthography) 上の違いである。キリスト教の神について表現する場合は、代名詞等においても頭文字を大文字にするという近代的な正書法の影響を受けているのが、「ハレルヤ・コーラス」の表現の仕方であろうと思われる。但しこの箇所で問題になるのは、Heが誰のことを指しているのかという点である。つまり、頭文字を大文字にする場合には、神について以外に特に『新約聖書』においては、イエス・キリストを指す場合もあるからである。すなわち、このHeは、神を指しているのか、キリストを指しているのかという問題である。このことに関しては、後ほど積義的考察を行う際に詳しく取り扱われることになる。

b. KING OF KINGS, AND LORD OF LORDS. ———

King of Kings, and Lord of Lords.

この場合は、a. の場合とは多少事情が異なっているように思われる。「ハレルヤ・コーラス」の場合は、神に対する讃美の呼びかけとして表現されていると解釈できるが、一方 The Authorized Version の場合は、タイトルとして表現されていると解釈できる。このことについて、The Authorized Version のこのタイトルが表現されているコンテキストを示すと、

次のようになっている。

And he hath on his vesture and on his thigh a name written, KING  
OF KINGS, AND LORD OF LORDS.

(19:16)

すなわち、『新約聖書』の『ヨハネの黙示録』に登場する、幻のうちにヨハネが見たとされる、「青白い馬にまたがる者」の衣服と腿に書き記されている名前、つまりこの人物の称号として、この表現が使われているわけである。

(3) the kyngdoms—— the kyngdom

この箇所の問題になっているのは、複数か単数かということである。また「ハレルヤ・コーラス」の本文の方は、複数を変数に変更しているわけであるが、その理由として考えられるのはどういうことであるか、という問題である。既に第1章でも少し述べたように The Authorized Version は、それ以前の英語訳聖書、特にウィリアム・ティンデル訳とジュネーブ訳の聖書を大幅に利用していると思われるので、この両英語訳聖書さらにはこの両英語訳聖書自体が原典としているエラスムス校訂によるギリシア語聖書、またそもそも英語訳聖書を生み出すきっかけともなった、マルチン・ルターによるドイツ語訳聖書の問題の箇所を比較することにより、この箇所での問題となっている、複数と単数の違いについて考察することにする。

the kyngdoms of this worlde  
are oure lordes  
and his christes,  
and he shall raygne for ever more.

(ウィリアム・ティンデル訳)

---

The kyngdoms of this worlde  
are our Lordes,  
and his Christes,  
and he shall raygne for euermore.

(ジュネーブ訳)

Es sind die Reiche der Welt  
unseres Herrn  
und seines Christus geworden,  
und er wird regieren von Ewigkeit zu Ewigkeit.

(マルチン・ルター訳)

*Ἐγένοντο αἱ βασιλεῖαι τοῦ κόσμου,  
τοῦ Κυρίου ἡμῶν,  
καὶ Χριστοῦ αὐτοῦ,  
καὶ βασιλεύσει εἰς τοὺς αἰῶνας  
τῶν αἰῶνων.*

(エラスムス校訂本)

以上の諸訳の例からも一見して理解できるように、The Authorized Versionの方が、これらの諸訳に近いということがいえよう。また問題となっている the kingdoms については、ウィリアム・ティンデル訳では the kyngdoms, ジュネーブ訳でも同様に the kyngdoms, またマルチン・ルター訳では die Reiche といずれも複数になっていることと、これら総べての諸訳が原典として用いたものと思われる、エラスムス校訂本においても同様に複数で記されおり *αἱ βασιλεῖαι* となっていることから理解できるように、「ハレルヤ・コーラス」の本文の the kingdom は、歌詞を担当した人物ジェニズにより変更の手が加えられた結果であることがわかる。

ところでこのエラスムス校訂本の本文は、出版後長い間「受け入れられ

た本文」という意味のテキストゥス・レセプトゥス (textus receptus) として、『新約聖書』の翻訳のためのテキストとして使用され続けるわけであるが、その後ようやく1775年になって、それまでの正文批判の研究成果を踏まえて、グリースバッハ (J.J.Griesbach) という人物が、新しいギリシア語テキストを発行することになる。このグリースバッハ校訂の本文によると、ただいま問題にしている箇所は次のように記されている。

*Ἐγένετο ἡ βασιλεία τοῦ κόσμου,  
τοῦ Κυρίου ἡμῶν,  
καὶ Χριστοῦ αὐτοῦ,  
καὶ βασιλεύσει εἰς τοὺς αἰῶνας  
τῶν αἰώνων.*

なおこれ以後のギリシア語テキストは、この箇所に関する限りにおいては、総べて同様の本文になっている。ところで、問題の the kingdom についてであるが、グリースバッハ以降の校訂本においては上記からもわかるように、*ἡ βασιλεία* と単数になっている。もしこの本文を『メサイア』の歌詞を担当したとされるジェニンズなり作曲者のヘンデル自身が知っていたという仮定がなりたてば、新しい正文批判に基づく本文により歌詞に修正を行ったと言えるのであるが、残念なことに、彼らがこの本文を知っていた可能性は年代的に考えてもほとんど無いといわざるをえないのである。それでは、一体彼らは、如何なる根拠に基づいて、the kingdom という単数の表現に修正することができたのであろうか。この可能性の一つとして、エラスムス校訂本以前において、またカトリックにおいてはその後においても、ギリシア語テキスト以上に圧倒的に権威のあったラテン語訳、すなわち、ウルガタ訳によるこの箇所を見てみると次のようになっている。

*factum est regnum huius mundi  
Domini nostori*



---

et Christi eius

et regnabit in saecula saeculorum

ここで the kingdom に相当する語句は、regnum と単数で表現されている。おそらくはこのウルガタ訳が参考にされて「ハレルヤ・コーラス」の the kingdom が生み出されたのではないだろうか。なお両ギリシア語テキストにせよマルチン・ルター訳にせよ、上に掲げた総べての英語訳に登場する this world の this に相当する語句が抜けているが、ただこのウルガタ訳には huius mundi と huius (of this) の型で登場していることから、英語訳聖書は、必ずしもカトリックの公認訳であるウルガタを退けてはいないということが理解できるのではないだろうか。

以上3点に要約して、「ハレルヤ・コーラス」の本文を考察したわけであるが、このことにより判明したのは、この本文が概ね The Authorized Version に従っているにもかかわらず、一字一句検討してみると、微妙な変更ないし修正の手が加えられている、ということである。『メサイア』の本文総べてを検討せずに推測することは、はなはだ性急なことかもしれないが、歌詞を担当したといわれているジェニズなり作曲者のヘンデルには、The Authorized Version に手を加える何らかの意図があったのではなからうか。しかし問題を「ハレルヤ・コーラス」の本文だけに限定していえることは、その変更の仕方が、『新約聖書』のギリシア語テキストの正文批判の成果を踏まえた本文により近づいているということである。そうするとジェニズなる人物が、かなり学問的素養のあった人物であったとも考えられる。また、ギリシア語原典の正文批判に関しては知識がなかったとしても、少なくともジュネーブ訳やラテン語ウルガタ訳は参考にしてきたことは推測できるだろう。ジュネーブ訳は The Authorized Version が出版されてからも、特にイギリスやスコットランドのプロテスタントによって愛読されていたわけであるし、ウルガタ訳はカトリックの公認訳であるということも考えると、ジェニズなりヘンデルは「英国国教会」の公認訳ともいえるべき The Authorized Version に対して、やや批判的で

あったというように考えられなくもない。いずれにせよ資料的に乏しい根拠によって、明確な結論めいたことはいえないが、少なくとも、The Authorized Version に対して、全く無批判に従っているわけではない、ということはいえるのではないであろうか。

### 第3章 「ハレルヤ・コーラス」の釈義的考察

第2章において、「ハレルヤ・コーラス」の本文について考察したわけであるが、この章においては、この本文に従って少し詳細な点にまで立ち入って、釈義的な考察を試みることにする。

#### (1) Hallelujah: for the Lord God Omnipotent reigneth.

この箇所は、『ヨハネの黙示録』19章6節からの引用である。この箇所を釈義するにあたって、参考のために、ギリシア語原典その他必要と思われる諸訳を掲げると次のようになっている。

*'Αλληλοῦῖα, ὅτι ἐβασίλευσε Κύριος  
ὁ θεὸς ἡμῶν ὁ παντοκράτωρ.*

*alleluia quoniam regnavit Dominus Deus noster omnipotens*

(ウルガタ訳)

*Halleluja! Denn der Herr, unser Gott, der Allmächtige, hat das Reich  
eingenommen!*

(マルチン・ルター訳)

*Alleluya, for god omnipotent reigneth.*

(ウィリアム・ティンデル訳)

---

Hallelu-iah, for our Lord God omnipotent hath raygned.

(ジュネーブ訳)

Alleluia: for the Lord God omnipotent reigneth.

(The Authorized Version)

なお『ヨハネの黙示録』は、『新約聖書』のなかでも独特なギリシア語を使用している。すなわち、『新約聖書』の諸文書の著者たちは、ギリシア人のルカと呼ばれる人物以外はおそらくユダヤ人であったと思われるのであるが、ギリシア語を母語とするパウロなどは例外的存在で、彼らにとってはギリシア語は第2言語であるわけである。特にいま取り扱っている『ヨハネの黙示録』の著者は、セム語系のアラム語を母語とする人物と考えられるので、アラム語で思考しながらそれを拙いギリシア語に置き換えている、といえるような表現方法を用いている。したがって、ギリシア語の原典自体がいわばアラム語の翻訳のような性格を持っているのである。このようなことを考慮すると、著者の思考のなかにおいては一体どのように表現されていたのかという点が推測できると、解釈も自ずと説得力のあるものとなるわけである。しかし残念なことに、そもそも『新約聖書』の原典自体が最初からギリシア語で書かれたものなので、原典から逆にアラム語に翻訳しなおすという作業が必要となってくる。アラム語の翻訳自体は存在するのであるが、必ずしも当時の慣用法に従った表現とはいえないのが現実である。しかし幸いなことに、アラム語ではないが、当時の宗教的文章語として使用されていた、ヘブライ語の慣用法にかなり忠実に翻訳されたフランツ・デリッチ (Franz Delitzsch) 訳が存在するので、かなり目標に近づくことができる。これらのことを考慮して、拙論においても、このフランツ・デリッチ訳を参考にすることにする。

הַלְלוּיָהּ כִּי־מֶלֶךְ אֱלֹהֵינוּ יְהוָה צְבָאוֹת :

(フランツ・デリッチ訳)

なおこの訳を便宜上ローマ字に音写すると次のようになる。

hallelūyāh khi- mālakh elōheinū adnai tsebā'ōth

a. Hallelujah

ヘブライ語 hallelūyāh の音写であることは、すでに指摘した。これは、ヘブライ語動詞 hillel (讚美する) の 2 人称命令法複数に, yāh (ヤーウエの短縮型, 神の名) が付加された型であり, 「汝ら神を讚美せよ」という意味である。しかし実際的には, マルチン・ルター訳からもわかるように, 一種の間投詞として慣習的に使用されている。

b. for the Lord God Omnipotent

ここで問題になるのは, the Lord God Omnipotent である。これはギリシア語原典では次のように表現されている。

*Kύριος ὁ θεὸς ἡμῶν ὁ παντοκράτωρ*

*kύrios* は英語では lord, *ὁ θεός* は the God, *παντοκράτωρ* は形容詞として omnipotent と訳されているわけである。この箇所は興味深いことに, 英語訳聖書のそれぞれが異なった訳し方をしている。

for god omnipotent

(ウィリアム・ティンデル訳)

for our Lord God omnipotent

(ジュネーブ訳)

for the Lord God omnipotent

(The Authorized Version)

すなわち, ウィリアム・ティンデル訳では原文の *kύrios* (lord) と *ἡμῶν*

(our) が訳されていないし、The Authorized Version でも ἡμῶν (our) が訳されていない、したがって「ハレルヤ・コーラス」の本文においても ἡμῶν (our) が訳されていないということになる。また omnipotent は、ウルガタ訳の omnipotens に由来する訳であることがわかる。この omnipotent は、したがってラテン語の omni (全ての) と potent (能力のある) の合成語であることがわかる。そうすると「全能の」という意味になり、ドイツ語のマルチン・ルター訳の der Allmächtige も、同じラテン語に由来していることが理解できる。しかしこのラテン語訳 omnipotens は、原文のギリシア語 παντοκράτωρ を正確に訳しているのか、という点にやや疑問が残るのである。すなわち、『旧訳聖書』のギリシア語訳である『70人訳聖書』(セプトゥアギンタ)においてこのギリシア語が用いられるのは、adnai tsebā'ōth というヘブライ語の訳語である場合が多いのである。そうするとフランツ・デリッチ訳のヘブライ語訳が最も原文のニュアンスを伝えているということになる。そうすると英語訳の omnipotent もこの adnai tsebā'ōth というヘブライ語をギリシア語 παντοκράτωρ とラテン語 omnipotens を介しての訳語と考えることができよう。ところでこのヘブライ語は英語訳の『旧訳聖書』では、直接ヘブライ語から訳されていて、概ね Lord (God) of hosts と訳されている。これは「万軍の主なる神」というような意味になる。またギリシア語の παντοκράτωρ も「総べてを支配する者」というような意味であるから、英語訳 omnipotent も「全能の」というよりは、「総べてを支配する力のある」という意味に受け取る方が、『ヨハネの黙示録』からの引用としては適切であろう。かくて、この箇所は「なぜなら、総べてを支配する力のある方、主なる神が」という解釈が成立することになる。

### c. reigneth

これは、ギリシア語の原文の ἐβασίλευσε の訳語であるが、ジュネーブ訳のみは hath raygned と現在完了形に訳されており、その他の訳では綴字法の違いはあっても、「ハレルヤ・コーラス」の本文に採用されている reigneth と同じ現在形に訳されている。ギリシア語の原文では、「アオリス

ト」というギリシア語独特の用法が使用されている。ウルガタ訳では *regnavit* と完了形に訳されており、マルチン・ルター訳でも同じく現在完了形で *hat das Reich eingenommen* と訳されている。すなわち、概ね完了形に訳されているといえるわけである。この「アオリスト」の訳し方については、後ほどより詳しく考察することにするが、簡潔に表現すると、時にあまり関係なくある出来事や行為を点的に把握する用法ということになろう。特に『新約聖書』のギリシア語では、神およびキリストの行為に対して、クロノス的ではなくカイロスの的に表現する場合に使用される傾向にあるように思われる。ヘブライ語では同じ表現を完了形で表現する場が多い、ということも付け加えておく必要がある。つまりこの場合も、デリッチ訳のように *mālakh* となる。

このような点を考慮すると、現在完了形に訳されている場合は、ある出来事の現在における影響を表現するものとして把握されていることになり、現在形に訳されている場合は時に関係なくいわば永遠の真理として把握されていることになろう。

ところでギリシア語の原文の *ἐβασίλευσε* にせよ、ウルガタ訳の *regnavit* にせよ、ヘブライ語の *mālakh* にせよ、総べてドイツ語訳の *hat das Reich eingenommen* からも理解できるように、「王となる」、「王権を掌握する」、あるいは「王としての支配を確立する」という意味を持っている。「ハレルヤ・コーラス」に使用されている *reigneth* の原形 *reign* は、語源的に見るとラテン語 *regno* に由来することは容易に理解できる。このこととの関連で、同じ語幹のラテン語を指摘すると *regno* (王である、王として支配する) *regnum* (王国、王権、支配等), *rex* (王、君主、君主の等) など総べて何らかの点で、「王」と関連している。したがって、この *reigneth* も「王となっている」、「王としての支配を確立している」というように解釈できる。

以上のことを纏めると、*Hallelujah: for the Lord God Omnipotent reigneth.* は、

---

汝ら神を讃美せよ、  
なぜなら、総べてを支配する力のある方、主なる神は、  
王としての支配を確立されているのだから。

と解釈することができよう。

(以下後編に続く)

#### 参考文献

- The New Testament Translated by Willam Tyndale* 1534. Cambridge: Cambridge University Press, 1938.
- The Geneva Bible*. The University of Wisconsin Press, 1969.
- The Holy Bible, An Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the Authorized Version*. Oxford: Oxford University Press, 1911.
- Lutherbibel. Biblia Germanica* 1545, *Faksimilierte Handausgabe nach dem Originaldruck*. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1967.
- Biblia Sacra. Iuxta Vulgatam Versionem*. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1983.
- The New Testament in Hebrew and English*. Cambridge: Cambridge University Press, 1977.
- The Original Greek Text After Scholz, A Complete Collation of Scholz's Text With Griesbach's Edition of 1805*. London: Samuel Bagster and Sons, 1841.
- The Greek New Testament*. Stuttgart: United Bible Societies, 1968.